KID’s workにおけるこどもの体験活動の展開

～子ども活動における若者のリーダー活動の在り方の再考～

北九州市立大学　社会システム研究科　地域コミュニティ専攻
学籍番号　2022M30002　大久保大助

【要旨】

NPO法人KID’s workは、小学生を対象とした体験活動（以下、「子ども活動」とする）の企画や運営を行う団体である。2009年に設立したこのNPOは、過去に参加した子どもが成長と共にリーダーとなって活動を継続し支えてくれている。2020年コロナ禍において、活動をすべて停止せざるを得ない状況に陥ったとき、こうした若者たちと共に、改めて活動の意義をふりかえり、そのあり方を考え、新たなプログラムをつくり行うことで、この状況を乗り越えた。この経験を経て、筆者のリーダーに対する認識が大きく変わった。彼らは単なる子ども活動を補助するためだけのリーダーではない。困難な状況に対して立ち向かい、柔軟な発想で新たなプログラムを生み出し、社会課題をも変える力が彼らにはあると強く感じた。

リーダー活動という視点から見ると、子ども会は、ジュニア・リーダーをはじめとする指導者養成の仕組みや、育成会といった運営の組織を地域に根付いた形で備えて活動を行ってきた。子ども会といえば、以前は誰もが知る子ども活動の代表的なかたちであったが、全国的にここ 40 年近く衰退を続いている。これは子ども会だけの話ではなく、地域で子ども活動を支えてきた社会教育団体にも共通する話である。こうした中、子ども活動にジュニア・リーダーなどとして関わる若者側の育成も行っていく必要性と意義があるとする言及も数々なされてはいるが、子ども・若者の生活環境も大きく変わっている中で、以前のような活発さを取り戻すのは難しい。

また子ども活動を行う多くの社会教育団体にとって、活動の焦点となるのは小学生の子どもであり、中高生などの若者は、あくまでも活動を支えるためのリーダーとして「小さく」扱われる。地域において青年期の若者に「大きく」焦点が当てられていた青年団体も、子ども活動と同じくあるいはそれ以上に衰退している。そうした中で近年、若者を対象とした取組や研究は、若者支援の文脈で語られることが多く、主に社会的困難を抱える若者を意味するようになっている。社会課題となっている若者支援は、非常に重要なテーマであるが、子どもたちが小学校を卒業した後に、自らの経験を活かし主体的に活動していける選択肢があまりにも限られてしまっている現在の社会教育の状況には、危機感を抱かれてならない。

ユニバーサルサービスとしてのユースワークという枠組みで実践される取り組みもあるが、このユースワークは個・場所・空間といった「居場所」論の延長線上に位置付けられている取り組みでもある。社会教育の場面において、子ども活動における若者がリーダーとして活動する意義を問い直し、リーダーがより主体的に活動できる場としての子ども活動を作り出すことはできないのか。そこで、子ども活動における若者リーダーの在り方を再考し、その視点を明らかしたいと考えた。

本研究では、実際にリーダーとして活動している若者の状況をより正確に把握し、彼ら自身の想いやまなざしを明らかにするため、NPO法人KID’s workの子ども活動におけるリーダー活動について調査を行った。調査は、KID’s workにおいてリーダーの活動経験のある若者に対してアンケート調査ならびにインタビュー調査を実施した。アンケート調査では、リーダー15 名に対して子ども時代の活動とリーダーとしての活動について、「参加の動機」、「活動内容」、「参加して感じていたこと」、「心に残っ

ているエピソード」、「リーダーについての印象」を尋ねた。インタビュー調査では、現在活動に参加している中心メンバーの 4 名に対して半構造化インタビューを行い、内容分析を行った。

アンケート調査では、子ども時代には「活動内容」「友だち」「リーダー」に対して注がれていた関心が、リーダーとしての立ち位置になってからは「自分の役割」「他のリーダー」に向けられる傾向にあることが分かった。また、インタビュー調査では、「リーダー同士の関係性はどのような要因から構築されているか」、「KID ’s work という団体を（自分にとって）どのような場としてとらえているか」、さらに「団体に対してどのように関わっていると感じているか」について、リーダーによって語られた言葉を整理し分析した。そして、これらの結果から、子ども活動における若者リーダーの在り方の再考を検討するための視点として次の 3 点が導き出された。

❑視点 1：若者リーダーに対する視点

子ども活動のリーダーということから、指導者は活動の対象者である子どもにその焦点が向かう。しかし、子ども同様、青年期にある若者は子ども活動のリーダーであると同時に、育ちの対象であり成長の主体である。そのためリーダーを育てる意識、それはリーダーを子ども活動のリーダーとして育てるのではなく、リーダーを 1 人の若者として育てる意識に向かわなくてはならない。

❑視点 2：活動の場づくりに対する視点

活動の場は、子ども活動によってリーダー活動が組織化される側面と、リーダー活動によって子ども活動が活発になる側面が共に存在する。そのため、指導者は「子ども活動からリーダー活動を作る」視点と「リーダー活動を通して子ども活動を運営する」視点との 2 つの視点が必要となってくる。さらに、子ども活動の場における「役割」は学びの機会である。その役割には十分な裁量を持たせ、リーダーが主体性を発揮ができるようしなくてはならない。役割を通して得られる学びは、学校とは異なる知であり、異なる方法で学び取られ身につけられていく。

❑視点 3：リーダー集団をつくる視点

リーダー同士の相互作用は、学びにおける動機付けや成果の確認、知識や技術・技能の獲得など学びを支え、促進する要素である。同時に集団の関係の中にあること自体が学ぶことでもあり、学びの機会でもある。集団でしが学べない事もあるのである。また集団となることで活動に大きな影響を与え、活動をより主体的に運営していくことができるのである。

今回のインタビューを通して、リーダーたちは達成感や悔しさなど感情面を言語化することによって、自身に新たな気づきがあり、学びとなっている様子も目の当たりにした。また、こうした省察的実践がリーダー自身だけでなく、指導者としての筆者や、団体としての次なる活動へ向かう動機にもなることも感じた。本研究によって明らかになった３つの視点は、今後の KID’s work における活動に活かしていきたいと思う。しかし一方で、ＮＰＯの行う事業は団体のミッションと活動方法がセットになっているため、リーダーとしての役割もその活動の範囲の中でのみ主体性が発揮できるのも事実である。引き続き、若者のリーダー活動の在り方を検討していきたい。